

対論 2

意識の皮膚：ファッションの哲学

鷲田清一×下條信輔

下條●お二人目のゲストをお招きしましょう。フッサールやメルロポンティから三宅一生まで、幅広く身体とモードを現象学する臨床哲学者、鷲田清一さんです。鷲田先生には衣服やお化粧と身体の関係についてお話を伺いたと思います。さっそくですが、まず先生のご専門である臨床哲学についてちょっと説明していただけますか。

鷲田●分かりました。哲学という学問の基本は、「自分って何だろう」とか「言葉って何だろう」といった、誰もそれなしでは生きていけないようなありふれた物事について考える学問なんです。でも日本では、哲学的思考というものがいまだに定着してないように思うんですよ。西洋哲学の研究という点では決して海外に引けを取りませんが、それは哲学学であって、哲学をすることとは別のことですよ。

哲学のテキストを開くと、難しい漢字がずらりとならんでいますが、例えばあそこに書かれている「存在」という日本語はbeingですし、「無」はnothing、「自我」はmeなりIなり、いずれにしても元々は、子供にも分かる言葉で綴られたものなんです。それをあんなしめこめめい言葉で表現するから、生活とかけ離れたものになってしまうわけです。

ですから、臨床哲学という言葉は耳慣れないと思いますが、実際に日常で私たちが使っている日本語で哲学をすることを入口にしていく学問だとご理解いただくといいと思います。あと付け加えると、哲学は元来、ソクラテスの時代から対話型の学問だったわけです。そこに立ち返って、現場に出かけて行って人と話すということを基本にしています。

下條●実は学生時代、哲学を専攻しようと思ったことがあるんですよ。でも、今、哲学学とおっしゃったけど、その訓話学だったり注釈学だったりする部分が非常に不満で専攻するのをやめた。ただの哲学ファンになったんですけど、もしそのとき先生がいらっしゃったら哲学に進んだかもしれません。

ヒトはなぜ身体を加工するのか

下條●では本題に入っていこうと思うのですが、鷲田先生は哲学をベースに身体からモードまでを現象学されているわけですが、現代人が身体を加工にこれほどまでに執念を燃やしていることについて、ご意見をいただけますか。

鷲田●身体を加工と言ってしまうと、ある種の特別な嗜好を持った人の領域のように思いますが、実はここにいらっしゃる方々ほとんど全員が、頭のてっぺんからつま先までを加工していると言っていると思うんです。女性のお化粧やピアスはもちろんですが、男性が毎朝ヒゲを剃ることのほうが激しい加工かもしれませんし、足にしても靴を履く生活でどんどん変形させているわけです。気づいてないかもしませんが、赤ちゃんの足と比べてみるとすごくよく分かります。このように「身体のありとあらゆるところが加工されている」ということ、このことは、身体を語る上で非常に普遍的な二つの認識の一つだと考えています。

そしてもう一つは、「自分の身体は実は自分から非常に遠いものである」ということ。自分の身体に対しては、自分に一番近

いモノ、自分そのものだと考えやすいんですけども、実はこれほど知覚データが少ないモノは珍しいんですよ。他人の身体は見えますが、自分の身体は後ろ半分は見えませんし、顔だって鏡に映った姿しか見えません。それから生命を維持する上で、また外界と関わる上で、もっとも大切な穴、つまり口であり、目であり、肛門であり、というような穴を、私たちは自分で見ることができないわけです。そういう意味で、自分の身体は実は自分から非常に遠いものと言えるわけです。

下條●確かに自分の身体はあまり見ていないし、見える部分も少ないですよ。つまり自分の身体のイメージというのは、生活経験から作った輪郭なわけですね。私はかつて、逆さまメガネをかけて1週間ほど生活したことがあるんですが、天地逆の場合ですと、足元を見下ろしたときに、私が遠くに、つまり視野の上のほうにいるわけです。最初はすごく戸惑うんですけども、1週間ぐらいうると、あるとき、こちら側がこちら側になるというか、視界を自然に認識できるようになるんですね。今のお話を伺っていて、自分の身体というのは物理的な認識というより心理的なものであり、いろいろな知覚の束を組み替えて作るものなんだということが、すごくよく理解できました。

モードと身体

下條●さて次に、身体からモードへという部分をもうちょっとお話いただけますか。先生は衣服を穴の開いた布であると書いていらしゃいますよね。

鷲田●この考え方にも二つのポイントがあります。一つは、自分の身体はイメージであるということ。よく衣服に対して「第2の皮膚」という言い方をしますが、私はイメージとしての自分の身体こそが「第2の皮膚」なんじゃないかと考えるわけです。そして、この自分の身体のイメージというのは、非常に壊れやすい。例えば今日、スタッフ全員で話し合せて、下條さんに会ったら、みんな困ったような顔をして目を逸らすとします。そうすると、下條さんはすごく不安になって、鏡の前にすっ飛んでいくと思うんですよ。

下條●いやあ、それはまずいですよ(笑)。

鷲田●たったそれだけのことで壊れてしまうほどに、自分の身体のイメージは脆いんです。ですから、私たちは常にそのイメージを補強する作業をしているんですね。例えばお風呂に入ったり誰かと抱き合ったりすることで、皮膚感覚でイメージを補強しているわけです。お風呂の場合、確かに血行を良くしてくれたりといった効果もありますが、それ以上に自分の身体感覚を補強してくれることが、心理的な安定をもたらしてくれるのではないかと思います。

下條●自分の身体イメージが非常に頼りないというお話から一つ思いついたんですが、これは思春期痩せ症の少女が目標体重を達成したときに描いた自画像です(*1)。目標体重といっても拒食症ですから、他の人が見ればガリガリなんですけど、本人にとってはこんな風に感じているんですね。これは病気だからという意味でお見せしたのではなくて、自分たちが思い描く自画像というのも、精神が作り上げたという点ではこの絵と違



*1



*2



Kiyokazu Washida

われないのではないかと思ったわけです。

鷺田●先ほどの皮膚感覚の話をもう少し続けると、その皮膚感覚を日常的に刺激してくれているのが、実は衣服なんですよ。衣服をまとうことで、自分の身体は衣服と擦れ合い、身体感覚が補強されるわけです。かつて三宅一生さんが10gに満たないワンピースを作ったんですが、装着感があまりになさすぎたのですね、流行らなかつたみたいです。現在では技術的には装着感をなくすことは可能なはずですが、結局のところそういう衣服は作られていない。やはり衣服にはある程度の装着感が必要なんですよ。人間は衣服によって自分の身体感覚を得ているんですから。

下條●なるほど。服の内側が皮膚と擦れ合い身体感覚を自覚させてくれるとともに、服の外側は人の視線を受け止めてくれるという役割も果たすんですね。

鷺田●そうですね、そのことが実は第2のポイントなんですが、ちょっとたいそう言い方をすると、「自然が文化に置き変わる」という現象だと考えています。衣服は言葉と並んで、自然に文化を持ち込むメディアなんですよ。

まず言葉というものは、生まれ持った発声を人為的に変換することで、声に意味を持たせたわけです。例えば、赤ちゃんは痛いときも熱いときも「ギャーッ」と泣き叫ぶだけですが、私たちおとなは痛いときは「イタッ!」と言うし、火傷するような熱さに触れると「アツッ!」と反射的に叫ぶわけです。これは自然な発声を言葉という文化に置き換えているわけです。

そして、身体というのも自然な存在ですが、それを衣服でおおうことによって、文化的な存在に置き変わるんです。人間の身体というのは筒に喩えられますが、衣服もまた筒なわけで、筒が二重構造になるわけですね。そうすることによって、身体の一部が隠されたり、内と外が現れたり、身体にさまざまな意味を呼び込むわけです。例えば襟元に人に手を突っ込まれると、ゾクッとしますよね。でも、そこは純粹に身体という意味なら外側のはずなんですよ。でも私たちの意識では、それはもう内側になっている。つまり、衣服をまとうことによって、内と外の境界線がズレるわけです。

下條●続いて、この話でも身体の内と外の境界に関わると思うのですが、ちょっとエロチックな話もしたいと思って先生の著作から引いてきたんですが、「体表面＝欲望と愛の地勢図」というフレーズについてお話いただけますか。先生は衣服の開口部にエロチックさを求められていたと思いますが。

鷺田●そうですね。他人の視線に対するファッションの誘惑力というのは、身体を象徴的に切断することだと思うんですよ。例えばルージュを引いたりアイシャドウを塗ったりすることは、唇なり目なりを身体の他の部分から切り取って見せる行為なんですよ。

それからもう一つ象徴的なのが、19世紀に編み出された黒の3点セット、つまりブラジャー、ガーター、ストッキングが21世紀を迎えた現在でもとてつもなく扇情的に感じられること。本来ならもっとセクシャルだったりエロチックだったりするものを、人間は見つけていいと思うんですが、それを見つけていないのは、この黒の3点セットが直線的に身体を切断してい

るイメージというものが、非常に強烈だからなんですね。そしてその切断のイメージがあるのが開口部なわけです。

例えばヨーロッパの社交界では淑女のドレスのデコルテ、胸ぐりがどれだけ下がるかで紳士はドキドキしたわけですよ。スカートの丈が短くなったりスリットが深くなったり、誰に教えられたわけでもないんでしょうが、ヒトは他人の視線を集める知恵を身に着けているんですね。

顔への執着

下條●ここでちょっとスライドをご覧くださいなのですが、これはファントム・リム、幻影肢(*2)です。腕を切断して長らく生活すると、身体地図が転写してしまうという話で、この切り口に触れると、存在しない指先に触れた感覚があるって言うんですね。人間の脳には体性感覚野という刺激に対する反応を司る部分があって、これはそこでの配線がズレてしまったんだろと言われてます。続いてこの写真は、ロンドンのミュージアムに所蔵されているものです(*3)。体性感覚野にはこういう身体のマップがあって、敏感な部分ほど脳内で処理する情報量が多くなるわけです。その情報量に基づいて作られたのがこの人体モデルなんですが、手や舌、顔が大きくて、ペニスもそこそこ大きくて、背中とかは逆にすごく小さいんですね。これを見たときに、自分の精神なり脳の中で反応する部分があって、しげしげ見ていると、自画像のような気もしてくるし、不思議な感覚があるんですよ。

鷺田●このモデルで大きくなっているところというのは、顔だったり、指先だったりヒトが化粧したり加工したりする部分に重なりますね。

下條●ほんとですね。これは面白い。この絵に関わるかどうかは分かりませんが、アメリカに顔に関する笑い話がありまして、ある男子生徒が女子更衣室に忍び込んだとき、ルーシーは股間を隠し、メアリーは胸を隠したんだけど、マーガレットは顔を隠したと。まあそれで誰が一番賢いかって話なんですけど、この話でも分かるように恥ずかしさとアイデンティティというのは、非常に密接な関係を持っていると思うわけです。そして顔こそは加工の最大対象でもあるわけで、最後に、鷺田先生に顔に関してひと言いただければと思います。

鷺田●顔というのは、自分以外のヒトが自分を認知してくれる情報が集中的に集まっている部分ですが、その大切な部分が、実は私の視野から全面的に外されているというアンバランスが、人間の顔への執着の源であろうと思いますね。

ただ私は、顔が人格であるという認識に非常に抵抗があるんです。確か創刊当初の『FOCUS』だったと思うんですが、三島由紀夫さんが亡くなったときの写真が掲載されていて、彼の遺体ということで、床の上の顔だけが写されていた。あれを見たときに私は、あそこまで鍛えあげた肉体が彼のものとしては優先されなかったことが気の毒な感じがしてね。

一般的に意味が希薄な部分に執着することをフェティシズムといいますけれど、執着するということ言えば、顔への執着だってフェティシズムではないか、って思うんです。

